



オランダ・アムステルダム(解説p.16)

地理・地図資料

帝国書院

2009年 2月号



多民族国家オランダ

(写真：オランダ／アムステルダム 帝国書院 2008年9月撮影)

オランダと聞いて思い浮かぶものは何だろうか。風車やチューリップ、チーズ、画家ゴッホを生み出したことでも有名である。実際にオランダの首都アムステルダムを歩くと、背の高いオランダ人（オランダ人男性の平均身長はヨーロッパで一番高く180cmともいわれる）のみならず、多種多様な民族が行き交う姿を目にする。レストラン通りを歩けば、インドネシア、トルコ、モロッコ料理などエスニック料理の店が軒を連ねる。

多くの植民地をかかえていたオランダでは旧植民地で生まれ育ったオランダ人も珍しくなく、アフリカの料理やインドネシアのスパイスが使われるなど、旧植民地の食文化がオランダ人の生活にとけ込んでいる。

同時に旧植民地からの移住者もオランダ国籍の市民として生活しており、移民や難民出身の国会議員も誕生している。

第二次世界大戦後から旧植民地のインドネシアおよび（現在はインドネシアになっている）マルク（モルッカ）諸島の南部からの移民が流入した。1960年代には労働者不足を補うためにイタリア、スペイン、ポルトガル、トルコ、モロッコ、ユーゴスラビア(当時)、チュニジアなど主として地中海沿岸の国々の労働者を受け入れている。他の西ヨーロッパ諸国が1950年代から外国人労働者の受け入れにふみ切ったのに比べると、オランダはいくぶん遅い。1975年のスリナム独立に伴ってスリナム系移民が入り、1980年代以降は外国人

労働者だけでなく、庇護申請者と避難民の流入が増加している。

外国人労働者のオランダ国内における就労は一時的なものであり、いずれは母国に帰還するという考え方は、多くの外国人労働者がオランダに家族を呼び寄せ、定住していくなかで崩れていくこととなった。

70年代末から移民は独自の文化、価値観をもち、オランダで生活していくためには社会的な支援が必要な存在としてとらえられているなど、移民の統合政策において、他の西ヨーロッパ諸国に比べると先進的だといえる。たとえば、移民がとくに多い大都市では移民支援センターのような施設がつくられ、生活に必要な情報を供給している。この施設ではおもに移民としてオランダに来た人や移民の二世、三世が職員として働いていることが特徴で、新規移民の生活環境や悩みをよく理解したうえで相談に乗っている。またオランダ語をまだ十分に理解できない移民が自分の母語で相談できるなど、新しい国で孤立しないよう配慮している。

しかし2001年にアメリカで起きた同時多発テロ以降は他の西ヨーロッパ諸国同様、イスラーム系住民に対する警戒感が増幅している。移民の子どもたちに保証してきた母語教育制度を廃止するなど、統合政策が同化政策に変化しているとの批判も絶えない。

(ドイツ-日本研究所 四釜綾子)